おくのほそ道

～芭蕉の歩いた道を訪ねて～

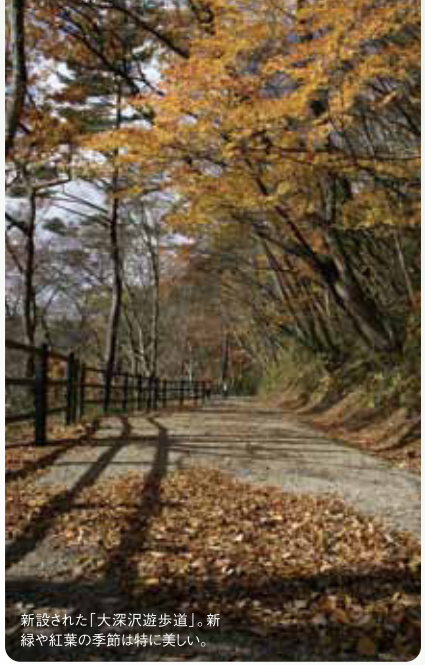
日本を代表する紀行文学「おくのほそ道」を記した松尾芭蕉。彼が辿った足跡はおくのほそ道として整備され、今も多くの人々に親しまれている。新緑や紅葉の季節にぜひウォーキングを楽しみたい。

～一関から鳴子へ～ 歩いて辿った山越えの旅

平泉の旅を終えた芭蕉は、一関から上街道を南下して岩出山へ。さらに進み鳴子入りした芭蕉は「尿前（しとまえ）の関」で関守に疑われ、やっとの思いで通過し進むも、風雨のため3日間とどまることとなった。その宿が現在も当時の姿を残す「封人（ほうじん）の家」だ。鳴子・中山平温泉の森の中に残るのは、今も芭蕉が歩いた当時のままの姿の古道「出羽街道中山越」。今回はウォーキングに最適な「尿前の関跡」から「封人の家」までの約10キロを、3つのエリアに分けて詳しく紹介する。

▲当時は深い谷底へ降りて越さなければならなかった「大深沢」。

◀出羽街道中山越の入口の坂「尿前坂」。



新設された「大深沢遊歩道」。新緑や紅葉の季節は特に美しい。

【コース所要時間】 小深沢～大深沢　約20分／大深沢～中山宿跡　約50分

【コース所要時間】 山神社～軽井沢　約20分／軽井沢～封人の家　約40分

【コース所要時間】
尿前の関～小深沢　約20分

一 尿前の関から小深沢

芭蕉が鳴子を訪れたのは、「おくのほそ道」の旅に出てから47日目のこと。しかし「尿前の関」に辿り着くも通行手形を持っていなかったため、関守に怪しまれてなかなか通過を許されなかった。芭蕉が通過に手こずったこの関所跡が、小深沢に至る道のスタート。芭蕉が訪れた6～7月には、関跡の広場に建てられた芭蕉像の傍らにツツジが見事に咲き誇る。

二 小深沢から大深沢・中山宿跡

「出羽街道中山越」は標高が低く、比較的越えやすい峠だった。そのため仙台藩は軍用の要衝として沢を越える道にも橋をかけることなく、旅人には難所として知られていた。芭蕉が歩いた当時はけもの道のようなわずかな踏み跡を頼りに歩いたとされている。現在、小深沢と大深沢の沢越えポイントには、板の橋がかけられており、道も整備され、ウォーキングに適した道となっている。

三 山神社から軽井沢・封人の家

「出羽街道中山越」の中で一番歩きやすく、ロケーションの変化が楽しめるのが「山神社」から「封人の家」までのコース。木漏れ日に照らされた、ゆるやかな起伏が続く明るい道には東屋やベンチもあるので、森の中でのひと休みも格別。どんどん進み、芭蕉たちが雨のため3日間足止めされた「封人の家」が現れたところで約10キロの旅が終了する。